

# 海外で求められる 日本人日本語教師の資質

—カッツのアドミニストレーター養成モデルとの比較から—

2007. 2. 3

中国帰国者定着促進センター

平畑 奈美

# 世界の日本語教師数

	海外	国内
教師数	33,124人	<b>28,511人</b>
(非母語話者)	(23,150人)	
(母語話者)	<b>(9,974人)</b>	

(文化庁 2003・国際交流基金 2003)

⇒日本語教師にとっての「海外」の重要性  
⇒「海外の日本語教育」における  
「日本人教師」の重要性

# 日本語が学ばれている国・地域

- 世界127カ国・地域、 2,356,745人
- 学習者の7割が上位3カ国に
  - ①韓国39.9% ②中国16.5% ③豪州16.2%
- 学習者の9割が上位10カ国に
  - ④米 ⑤台湾 ⑥インドネシア ⑦タイ
  - ⑧ニュージーランド ⑨カナダ ⑩ブラジル

# 海外の日本語教育の実情

- 日本語学習者は環太平洋地域に集中  
物理的距離と経済的關係、  
相手国の言語政策が  
日本語教育を促進する

⇒ 日本語教育未発展国との落差  
国・地域ごとに大きく異なる事情

# 日本人日本語教師に問われる条件

- 日本人であること
- 学歴、資格、専門性
- 参加費用

⇒「教師の資質」は問われていない

⇒それでも「資質」は必要

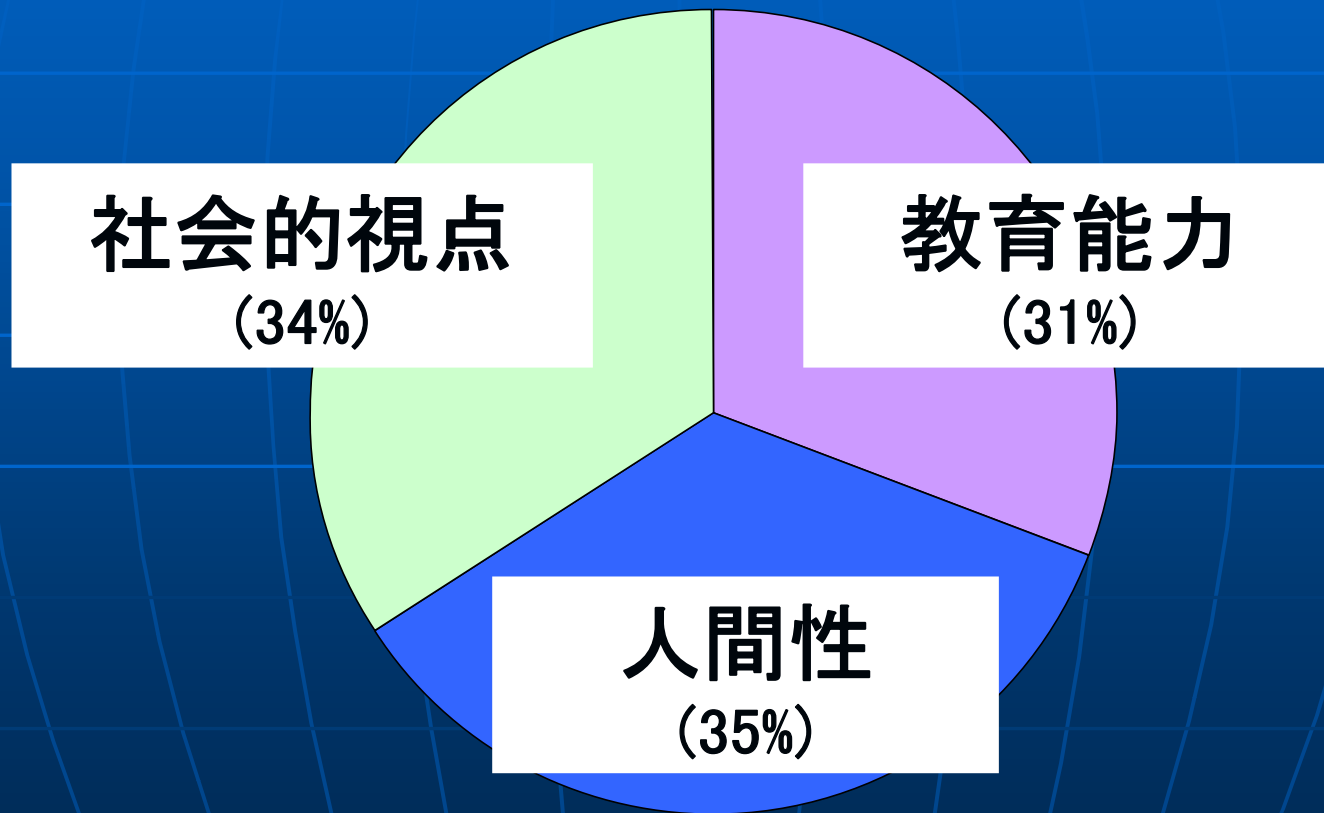
⇒どんな「資質」が必要なのか

# 日本語教師の資質

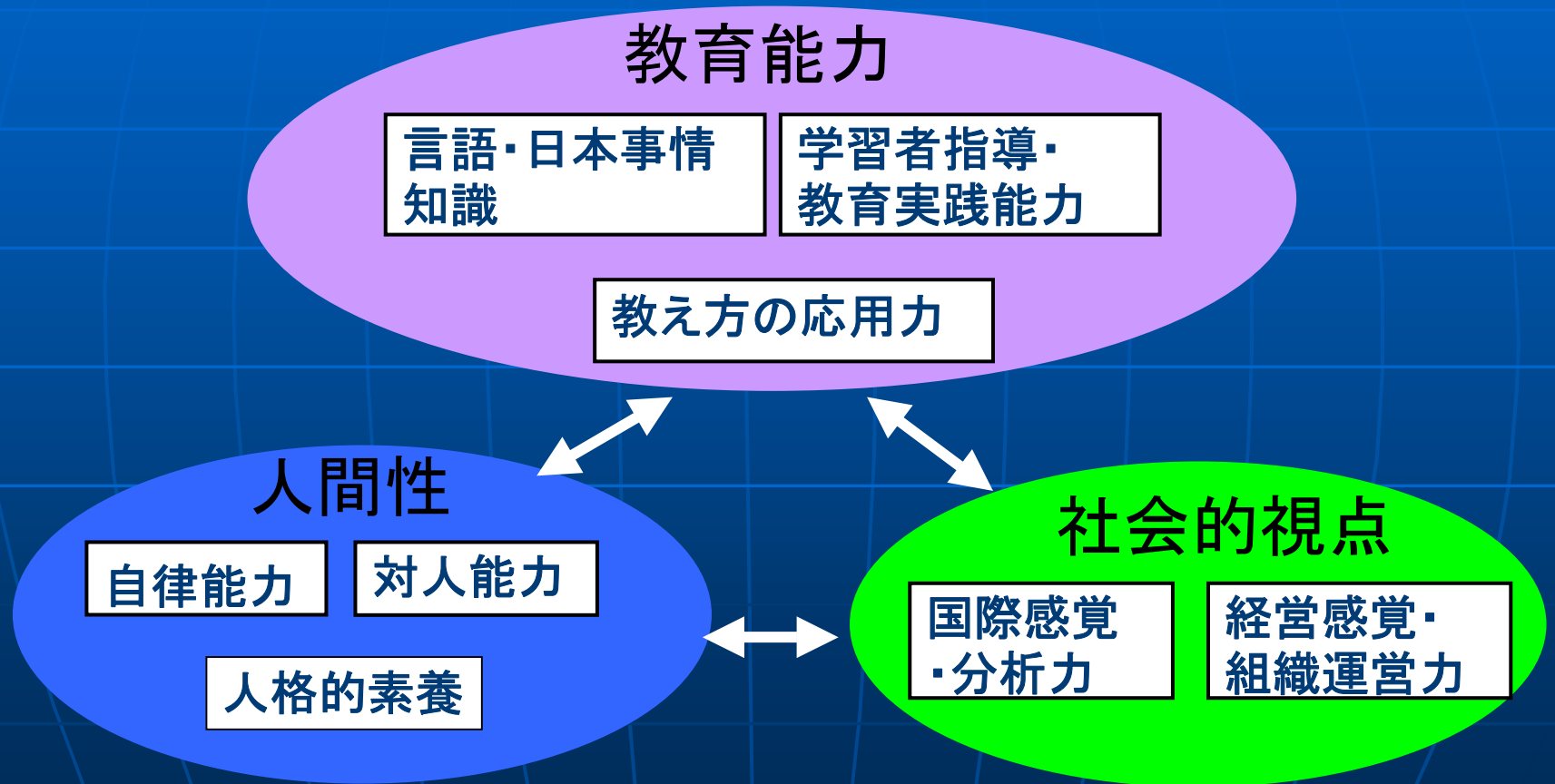
- 日本語能力試験2003年に改訂  
言語重視⇒「言語」「教育」「社会・文化」へ
- 国内の研究の主流  
人間性、共感性 「やさしさ磨き」の重視  
カウンセリング理論の影響
- 海外での調査例  
実務能力、マネージメント能力、自己開示、  
自己主張、ストレス管理、対人問題処理能力

「強さ」への着目

# 海外で日本人日本語教師に求められる3つの資質 有識者24名へのインタビュー分析から

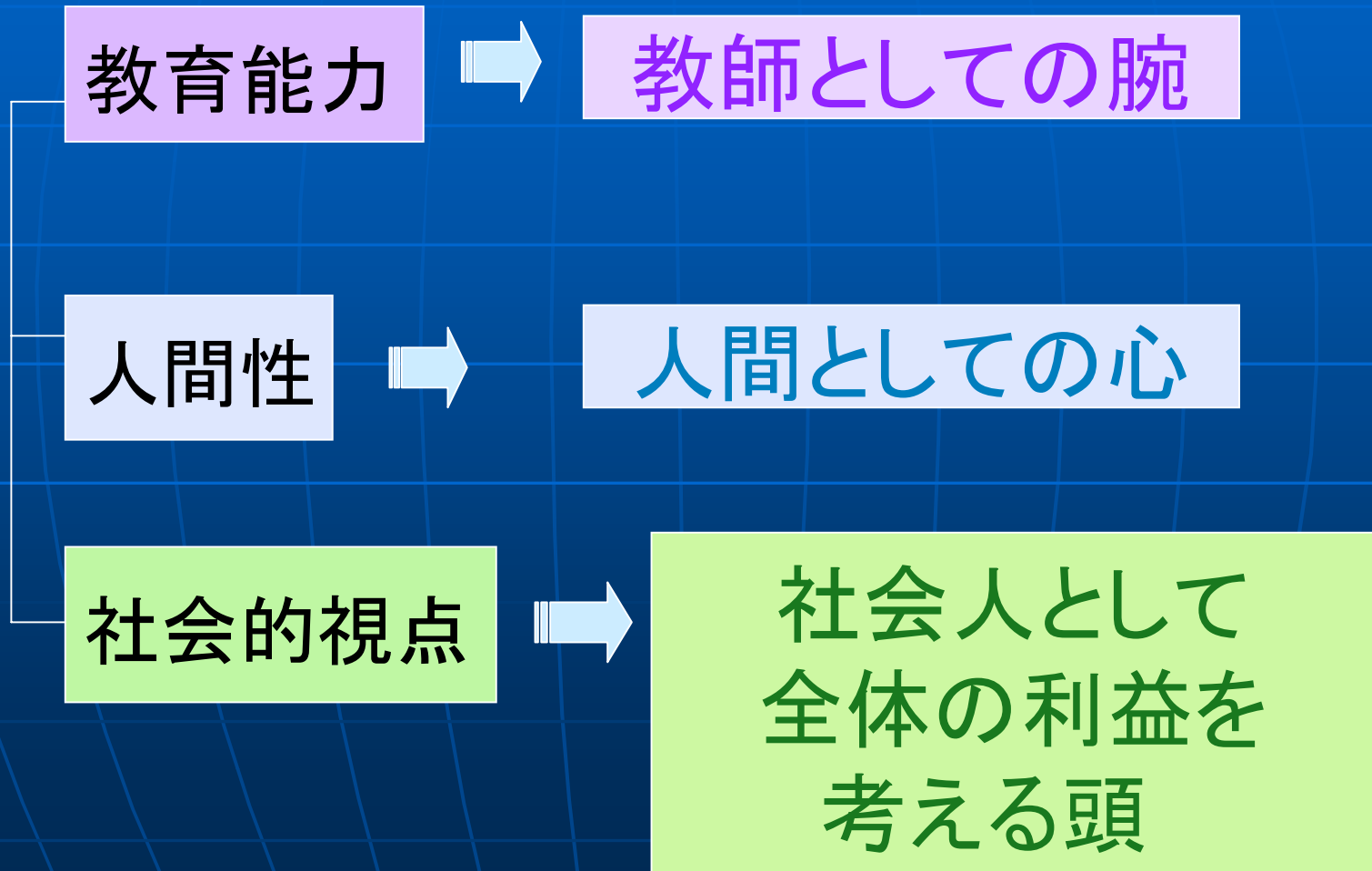


# 海外で日本人日本語教師に求められる3つの資質 有識者24名へのインタビュー分析から

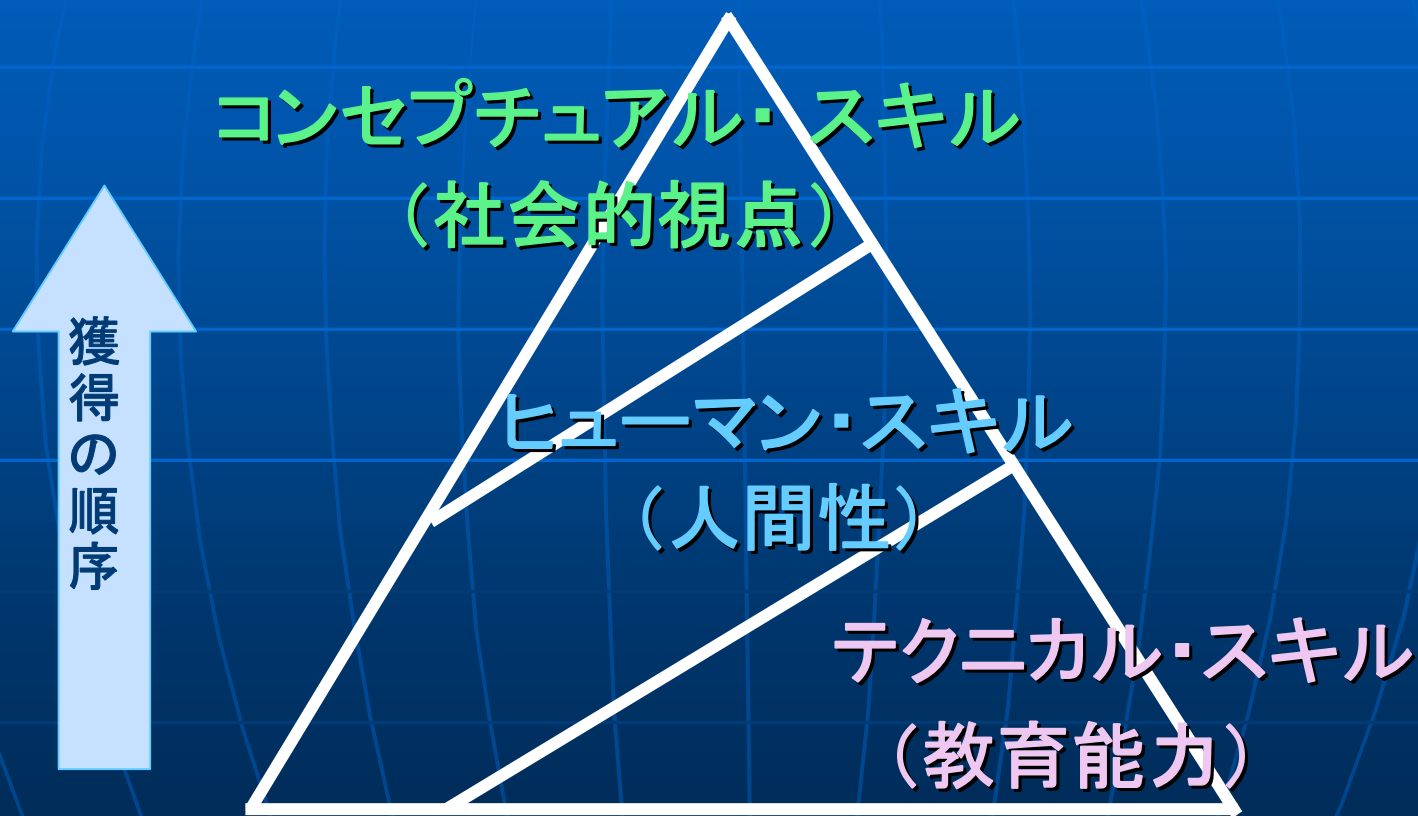




# 日本人日本語教師に求められる3つの資質



# カツツ(1955) アドミニストレーター育成モデル ＜企業の人材育成の基準＞



# カツツのスキル獲得手段

テクニカル・スキル  
特定業務の技能・知識  
第一段階の資質

日々の業務の中で

ヒューマン・スキル  
周囲の人との協働能力  
常に必要な資質

日常的な人間関係・  
社会生活の中で

コンセプチュアル・スキル  
業務の位置づけ、方向性の決定  
最終段階の資質

「変化」の経験  
育成の場が必要

# コンセプチュアル・スキル獲得の方法

## ＜カッツの提案＞

- ・業務ローテーションを経験する
- ・優れたメンターにつき指導を受ける

## ＜日本語教育では＞

- ・海外の数多くの事例に触れる
- ・ネットワークの中での学習
- ・教師養成制度、派遣制度の枠組みの変化

## テクニカル・スキルの必要性の根拠

- 海外では任される仕事の幅が広く、  
肩代わりしてくれる人が少ない  
(初級から上級まで、文学から経済まで)
- 各国学習者の気質に合わせる必要  
(教養重視の欧州、活動性を求める米・豪、  
受験勉強型の東アジア、ビジネスニーズの強い東南アジア...)
- 「ネイティブはオールマイティ」  
「権威」と「正当性」を付加される

## テクニカル・スキルの欠如による弊害

- 学習者の語学能力だけでなく、自尊心を損なう  
「私たちの時間が勿体ない」
- その焦りから、さらに周囲との関係性を損なう  
「ネイティブには会話と作文しか任せられない」  
「何もできないのにいばっている」
- 「日本語教師の仕事は、  
消防士が火を消すように日本語を教えること」

# ヒューマン・スキル必要性の根拠

- 異文化環境が人を変える

アジアで強く、欧米で弱い「日本人」

- 「ネイティブの正当性」の上に加わる「日本人性」  
「日本人」であることの特別さ

①めずらしく貴重な存在→ 人気・羨望の対象

②傲慢な異分子→ 反発・服従の対象

③閉鎖的で分かりにくく、  
迎合するだけの存在→ 疎外・軽視の対象

## ヒューマン・スキルの意味するもの

- 元気で落ち着いている
  - 最初から最後まで同じように勤められる
- 親切で「みんな」と「普通に仲良く」できる
- 海外で「みんな」を把握する難しさ
  - ～ある人の利益が ある人の不利益に～
- 「やさしい」だけでは不十分
  - 受け入れることと立ち向かうこと
  - そのために人々を知ること



# コンセプチュアル・スキル必要性の根拠

- なぜ、そこで日本語を教えるのか
    - そこでの日本語教育の価値を考える
  - そこで「正しいこと」「よいこと」とは何なのか
  - 「現地のニーズ」の表面性にとらわれず  
「自分自身のニーズ」を、自己満足で終わらせ  
ないために
- ➡「差異と共通点を読み取り、対応する能力」

# コンセプチュアル・スキル獲得のために カテゴリーの拡大

- 個人の中のカテゴリーは、  
比較材料が増えるほど豊かになる
- 「後退する異文化」  
町から地方、地方から国家、国家から地域、  
地域から世界
- 他者がなければ自己はなく、  
「外国」がなければ「日本」はない

# 「知ること」の先にあるもの

- すべての「差異」に根拠と必要性がある
- 「差異」は、比較の問題  
～同じといえれば同じ、違うといえれば違う～
- 「差異」の現実としての、「格差」の深刻さ
  - 「日本」と「外国」
  - 「日本語」と「現地語」
  - 「日本語」と「他の外国語」 の関係

# 「よいものの中のひとつ」としての日本語教育へ

- only one ではなく、one of goodness
- 「対等」「公平」「共生」「相互交流」の、  
ありえないほどの難しさを知る
- 自身の判断の基準を作り、  
それに対する責任を持ち、それを変化させていく

「日本語教師は外へ」  
～より多くの情報と、多くの差異に直面を～